

例会の記録

第504回 平成29年9月17日(日) 於柿衛文庫
其角の漢籍受容 三原尚子

——「嘲仏骨評」を中心に——
芭蕉発句における音韻の中国語訳 胡 文海

江戸座二世祇徳門の俳諧 早川由美
——高点付句集と歳旦——

蕪村筆「緑陰渡水図」(仮題) について 藤田真一

第505回 平成29年10月15日(日) 於柿衛文庫
『宇陀法師』輪読 松尾真知子

同 露口香代子
『続あげがらす』輪読 村井磨音

第506回 平成29年12月17日(日) 於柿衛文庫
神沢杜口の俳諧 奥野照夫

「海棠」考 中村真理
『宇陀法師』輪読 露口香代子

第507回 平成30年2月18日(日) 於柿衛文庫
『続あげがらす』輪読 露口香代子

俳句の受容と英訳俳句
—ブライスとヘンダーソンの英訳俳句—

神沢杜口の俳諧 小村志保美
『宇陀法師』輪読 奥野照夫

第508回 平成30年3月18日(日) 於柿衛文庫
シンポジウム 露口香代子

「世界の中の俳句(HAIKU)」
詩としての俳諧、俳諧としての詩 マブソン青眼

芭蕉発句における中国語訳
—四言詩形での試み—

H・Gヘンダーソンの英訳俳句 胡 文海
小村志保美

第509回 平成30年4月15日(日)
於関西学院大学梅田キャンパス

『宇陀法師』輪読 露口香代子
『続あげがらす』輪読 胡 文海

第510回 平成30年5月20日(日) 於柿衛文庫

去来著「旅寝論」
—書誌と序文—

『其蛸庵杜口発句集』に登場する人物 藤田真一
奥野照夫

第511回 平成30年6月19日(日) 於柿衛文庫
『其蛸庵杜口発句集』—杜口と蕪村— 奥野照夫

『続あげがらす』輪読 黒川悦子

第512回 平成30年7月15日(日) 於柿衛文庫
『続あげがらす』輪読 西出春菜

『旅寝論』輪読 三原尚子

俳文学報

会報 大阪俳文学
研究会 第52号

【頒価千五百円】

平成三十年十月十二日 印刷発行

発行所 大阪俳文学研究会

〒670 8542 姫路市上天野七丁目二一

姫路獨協大学外国語学部

渡邊志津子研究室内

振替 〇〇九〇〇一五七三六〇

印刷所 サンキ印刷株式会社

〒531-0076 大阪市北区天淀中一丁目七ノ一四

電話 〇六四三二一六五四一(代)

俳文学報

大阪俳文学研究会

第五十二号

(平成30年10月12日)

ISSN 2188-1340

俳文学報

会報

大阪俳文学
研究会

平成30年10月

立圃の立脚点	松尾真知子	1
東西の秋風	深沢 真二	10
芭蕉発句の中国語訳	胡 文海	18
又平花見風流	藤田 真一	18
『骨書』七歌仙	富田志津子	4336
『青ひさご』	黄 佳慧	52
寛政七年板「ひさご」の板本について	露口香代子	64
最晩年の鳳朗	金田 房子	71
山口誓子と正岡子規	米田 恵子	78
シンポジウム「世界の中の俳句(HAIKU)」	マブソン青眼	85
ハロルドG・ヘンダーソンの英訳俳句	小村志保美	10193
中国における芭蕉発句の翻訳実態	胡 文海	10193
投稿要領		113
規約		
例会の記録		

第52号

『青ひさご』における漢詩句を題とする発句について

黄 佳 慧

一、緒言

本稿では漢詩句を題として詠ずる発句を便宜上「詩題俳諧」と総称する。「詩題俳諧」は近世初期にすでに見られ、尾張俳壇の荷兮編『阿羅野』（元禄二（一六八九）年芭蕉序）に収録され、野水の「詩題十六句」が漢詩句を題にして発句を詠んだことにより、その句作りが定着するようになったかと考えられる。その後、同じく尾張俳壇の越人を中心に詩題俳諧が詠まれ、さらに「俳訳」のような特徴が見出せることを、これまでの拙論¹⁾で検討してきた。

近世中期には、『唐詩選』の爆発的流行によって、特に江戸俳壇で唐詩を題にして詠む詩題俳諧が作られるようになる。最初は雪門²⁾が、『唐詩選』卷之六「五言絶句の漢詩をいくつか選出して俳諧の三物³⁾を詠む『唐詩選三物』（宝暦七（一七五七）年以前刊行と推定。）と『唐詩三物』（宝暦七年跋）を刊行した。『唐詩選三物』は雪中庵三世・大島蓼太（一七一八—一七八七）が詠んだ俳諧三物を掲載する個人作品集で、『唐詩三物』は雪門の撰集である。その後、葛飾派三世の溝口素丸（一七三—一七九五）も『唐詩選』卷之

六「五言絶句」にあるいくつかの漢詩を題にして発句（天明七（一七八七）年前半頃）を詠んでおり、素丸十七回忌追善集『青ひさご』（文化八（一八一—）年跋、葛飾派五世・関根白芹編集）に収録されている。

このように見ていくと、詩句を題にして俳諧を詠む現象が近世中期になって如何に変容したかは興味深い。本稿では、『青ひさご』に収められた漢詩句を題とする発句を中心に、詩題俳諧の近世中期以降の発展についてを考察していく。

なお、資料の引用に際して、現在通行の字体を用い、適宜、改行、濁点・句読点を補った。

二、『青ひさご』に収録された詩題俳諧について

『青ひさご』という俳諧集は、先行研究⁴⁾が解明したように、半紙本で一冊、九十七丁あり、葛飾派五世の白芹が葛飾派三世の溝口素丸の遺作、及び葛飾一派の俳諧作品を収録したものである。書名の由来に関しては、本書で次のように記している。

かく消息あたりて左の一章を末期の名残とはし給ぬ。よ

て此冊の表題に青ひさごを冠らしめて脇起の追福に備ふ。

青瓢ふるくゝ果や秋の水 亡師

『青ひさご』五五丁オ)

すなわち、素丸の辞世吟「青瓢ふるくゝ果や秋の水」の「青瓢」によったと分かる。また、編纂の目的について、跋文で次のように述べている。

此秋素丸尊師の十七回忌なり。門人白芹の主生得篤実にしてよく師の教を守り、しかも今師の跡をたれて諸生を導き、日々の俳諧門弟あまたし。よて人々の句々を拾ひ小冊子となし、手向たまへり。猶葛飾の俳風世に広ごらん事を寿ぎ已ぬ。

本書の編纂者である白芹は、先師の教えを受け継いで門人を導き、その甲斐あって葛飾派はさらなる発展を遂げており、素丸十七回忌追善の機に、葛飾一派の俳諧撰集を一冊にまとめ、先師に供え、葛飾の俳風が末長く世に広まってくことを祝おうという意図であった。それゆえ、本書は葛飾派を代表する俳諧を集めた一冊であると考えられる。

本書には素丸の「詩題俳諧」が十八丁オより十九丁ウまで収録されている。これらは、門人の二世白花園（二世南台・六世其日庵）が収蔵していた素丸の独吟である。その前後には素丸の独吟歌仙と素丸を含めた東都蕉門の興行が、それぞれ天明七（一七八七）年三月と五月にあったことが記されている。よって、その間に挟まれて並んだ素丸の詩題俳諧は、天明七（一七八七）年前半頃に成立したものであろうと推測

される。

素丸の詩題俳諧は、『唐詩選』「卷之六」に収録した五言絶句を題として詠じた発句である。明朝・李攀龍選とされる『唐詩選』は享保九（一七二四）年に荻生徂徠の高弟・服部南郭の校訂によってはじめて和刻本が刊行されてから、何度か重版が行われ、大好評を受けていた。特に大庭卓也氏の論考「和刻『唐詩選』出版の盛況」を参照すればわかるように、近世における『唐詩選』の活字版はすくなくとも七十五種類が刊行され、大流行していたことは言うまでもない。本稿の最後に整理した【添付資料】をご覧になると分かるように、豊富な刊行種類からテキストを絞ることは困難である。しかし、『唐詩選』の中で、素丸の引用した五言絶句が収録されていない⁵⁾、あるいは全詩文が揃っていない書物⁶⁾もある。また、注釈のないアンソロジーや、漢詩の掲載順番を新たに入れ替えた詩集⁷⁾、もしくは「江戸本屋出版記録」⁸⁾で見出せない撰集⁹⁾などは、素丸が参照していない可能性がある。そこで、本稿では素丸の活躍した時代に多く流通し、注釈も全詩文も揃い、「江戸本屋出版記録」で確認できる『箋註唐詩選』と『唐詩児訓』での注釈と解釈を参照しつつ、『唐詩選』の詩句を題として詠んだ素丸の発句の考察を行うこととする。

一方、同時期に『唐詩選』「卷之六」に収録した五言絶句を題とした俳諧というと、宝暦七（一七五七）年前後に刊行された雪門の『唐詩選三物』と『唐詩三物』が想起される。

同書を紐解いていくと分かるように、俳諧の三物の形式で詠まれ、雪門の蓼太も三物に関する論書¹⁶を著したことなどから、連歌俳諧の付合いを重視していた姿勢が見て取れる。それに対し、葛飾派を復興して、江戸俳壇の一派として成り立たせようとし¹⁷、天明四（一七八四）年の春に「葛飾蕉門」と自称した¹⁸素丸は、無論明らかに雪門と異なるルートを取っている。

素丸の俳諧理念と言えば、素丸の門人―絢堂徳布の編集した『素丸発句集』¹⁹序から垣間見える。

（素丸は）和漢の正史に広くわたり、及び内外の諸書に通じ、俗談平話をただすまで、道の事に夜日を厭はず、教誨に倦まず。

つまり、素丸は博識な俳人である上、雅文や漢文といった硬い言葉を、日常に用いる表現に言い換えるという俗談平話を実践するために、日々努力していると門人に評価された。

したがって、雪門がかつて先行して『唐詩選』の五言絶句を題にした『唐詩三物』に対して、素丸も『唐詩選』の詩句を題にして複数の発句を詠んだのは、単に当時の『唐詩選』の流行に影響を受けたことにとどまらない。素丸においては、三物の形式を取った雪門とは対照的に俗談平話の理念を具体化しようとする作意を否定し難い。そこで、本稿で素丸の詩題俳諧を検討する際には、漢詩を題に発句を詠むという踏まえ方を考察するだけでなく、さらに漢詩を平明な話し言葉にする俗談平話の俳諧に転じる、という素丸の取り組みも併せ

て視野に入りたいと考える。

三、素丸の展開した詩題俳諧

素丸は『唐詩選』「五言絶句」から八首を選出して、それぞれ一句、または二句の発句、合計十一句を詠みあげた。その発句が殆ど体言止めでしめられていることから、句に余韻を響かせようとする目的があったことは自明であり、素丸が取り立てたい事物や主題も一目瞭然に知られる。この十一句の中には、原詩に唱和する発句もあれば、原詩の内容を新しく転じたものもある。まず、具体例を挙げて検討していこう（なお、発句の前に筆者が付した番号は、素丸の詠んだ発句の順番である。以下同様）

「題袁氏別業」

主人不相識 偶坐為林泉

莫謾愁沽酒 囊中自有錢

① 涼しさを酒で借りけり山やしき 素丸

（季語：「涼しさ」で夏）

② 酒買ん竹の子くれよ屋敷守 同

（季語：「竹の子」で初夏）

最初に原詩の解釈について『箋註唐詩選』を見てみたい。袁氏と面識のない詩人の賀知章が、袁氏の別業（屋敷）を訪ねていった。賀知章が主人の袁氏と向かい合って座り、立派な庭園だと賞賛すると、袁氏は詩人を気遣い、酒を用意しようとする。すると、賀知章は気遣いはいらぬ、自分の財布

の中に酒を買う金を持っているからと言った。きっと袁氏はそれを面白いと笑って、このような幽景に酒なしでいられようかと詩人を欲待したのであろうと解釈している。また、『唐詩見訓』では言葉ごとに詳しく説明した上で、「戲謔ノ詞ヲ以テ、好ク真情ヲ得タリ。又袁氏ガ不風雅ナルヲ諷スルカ」と最後に評価を加えている。

素丸が原詩を踏まえて詠んだ二句は、①「山にある別荘（屋敷）で詩人が酒で涼を取る」と、②「酒を買おう、竹の子をくれよ」という。両者を対照すればわかるように、漢詩においては、詩人が別荘の主人に配慮は不要だと伝えているのに対し、俳諧においては、別荘の亭主が屋敷守に風雅な款待を用意させようとすることへ展開を見させている。②で「買ん」や「くれよ」という話し言葉の表現が見られ、この①と②の句の読み易く平明さを生かした響きが伝わってくる。

「子夜春歌」

陌頭陽柳枝 已被春風吹

妾心正断絶 君懷那得知

③ 浦山しくも風に寄合ふ柳哉

素丸
（季語：「柳」で春）

原詩「子夜春歌」では女が良人を恋しく待つ心を詠んでいる。③の句の、「浦山しく」は「羨ましく」²⁰の掛詞である。また、「寄合ふ」は「日葡辞書」を参照すると、近世初期には「夫婦になる」という意味を持っていたことがわかる。つまり、③は原詩に唱和しながら、羨ましいほど睦まじく雲風に葉を

寄せ合う柳だなあ、という女の心情を描いている。

「秋浦歌」

白髮三千丈 緣愁似箇長

不知明鏡裏 何處得秋霜

④ 鏡から降るかかしらの年の霜 同

（季語：「霜」で秋冬）

原詩「秋浦歌」は『箋註唐詩選』や『唐詩見訓』が説明するように、李白が謫居した時に作った自ずと愁いを歎ずる詩である。素丸は特に「不知明鏡裏／何處得秋霜」に響き合せて、鏡に映った白髪は鏡から降り落ちた霜なのか、と原詩の驚きを再現し、虚しく古い、鏡に映った霜を置いたような白い髪を表現した²¹。

「独坐敬亭山」

衆鳥高飛尽 孤雲獨去閑

相看兩不厭 只有敬亭山

⑤ たゞ雲に目のつく秋や飛鳥山 同

（季語：「秋」で秋）

⑤の原詩は『箋註唐詩選』や『唐詩見訓』が説明するように、多くの鳥も片雲も消え去り、目を遮るものも動くものもなく、あたりはひっそり静かになり、友として見つめ合って厭わないのは敬亭山のみだとある。それに対し、素丸の発句では「敬亭山」を江戸の名所²²「飛鳥山」に書き換えつつ、「飛鳥」の文字に原詩の「衆鳥高飛」の情景を巧妙に再現している。そうして、秋に小高い飛鳥山に立てば雲ばかりが目

立つと素丸は詠んだ。

「竹里館」

独坐幽篁裡 弹琴復長嘯

深林人不知 明月来相照

⑥ 琴弾ば魂清し竹の月

同

(季語：「月」で秋)

⑥の原詩は、静かな竹林²³の中にただ一人座り、琴を弾き、詩を吟じているけれど、奥深い林の中に知る人もなく、ただ明るい月のみ照らしているという。発句では、竹林に琴を弾く心の清々しさを、竹林を照らす月とかけ合わせて詠んでいる。

「長信草」

長信宮中草 年年愁処生

⑦ 昏嚙んで捨てた所か忍ぶ草

同

(季語：「忍ぶ草」で秋)

時侵珠履跡 不使玉階行

⑧ 沓ぬぎのあとも忘れず蝸牛

素丸

(季語：「蝸牛」で夏)

⑦と⑧は同じ原詩で、⑦が起・承句、⑧が転・結句を踏まえて詠んだものである。⑦が踏まえた原詩では、『唐詩兎訓』で説明しているように、皇帝の寵愛を失った班婕妤が、住まう宮殿・長信宮で徒らに歲月を費やし、人の愁いが生じるように、庭の草が盛んに伸びて生い茂っている。『唐詩兎訓』ではこの二句に対して、「扱我^ヲ爲^ニハ此地^ハ愁^ム処^ナルニ。此

草ハ何床^ナシケレハ、年年ニ忘レモヤラデ」と解釈している。一方で、素丸の発句では、長信宮に生えた草を、思い忍ぶ恋や思い慕う心情を意味する「忍ぶ草²⁴」と表現した。また、「昏嚙んで」とは、「文を嚙縮める」と「鼻紙で鼻をかむ」という雅俗を補完し合う二重意味を持たせた表現として汲み取れる。すなわち、「忍ぶ草」が生えている周辺は班婕妤が手紙を噛みしめ、泣いて鼻をかんで捨てたところであろうか、と問いかけている。

⑧の発句が踏まえる原詩では、庭の草が盛んに伸びて生い茂っていくため、皇帝の足跡を消すだけでなく、宮殿への階段さえ見えなくなつて、草を怨んでいるとある。このような詩意に対して、素丸は、草が生い茂りかつて沓脱石があった場所を覆い隠しても、這ったあとにテカテカと光る粘液が残り、蝸牛²⁵はその場所を覚えているものと詠み、原詩の意と対照的なイメージを伝えている。この一句では、和歌でよくいう家(殻)を捨てない蝸牛²⁶を、漢詩に詠まれた皇帝の足跡が消されていく虚しさに対比させつつ、『和漢朗詠集』「無常」の項目にある白居易の詩句「蝸牛角上^ニ争^フ何事^ヲ」一、石火^ノ光中^ニ寄^リ此身^ヲ」²⁷のように、移れば変わる世の習いを想起する。この二句には、素丸が詩句と異なる視点に転じて発句を詠もうと、日常生活で親しみのある「忍ぶ草」や「蝸牛」などの風物によって、詩の情景を展開していく様子が見出せる。

「汾上驚秋」

北風吹白雲 萬里渡河汾

⑩ 白川や半バ老行笠の秋

同

(季語：「秋」で秋)

心緒逢搖落 秋声不可聞

⑪ 憂き声を身に調べけり²⁸ 秋の風

(季語：「秋の風」で秋)

⑩と⑪は同じく「汾上驚秋」を踏まえ、⑩は起・承句、⑪は転・結句を題にして詠んだものである。まず、⑩の原詩では、秋風が白雲を吹き、故郷より万里も越えた旅を経て、いま河汾という川を渡る詩人の旅の憂いを描いている。素丸は発句で「河汾」を秋風の吹く「白川」に言い換えている。「白川」とは従来山城国の歌枕として知られ、陸奥国の「白河の関」を連想させることもあったという²⁹。それに加え、『俳諧類船集』「都を思^フ」の項で、能因の和歌の下句「秋風そぶく白川の関」を想起すると提示したように、「白川(白河)」には故郷に焦がれる想いが内包されている。つまり、白川を前にして故郷を恋しく思いつつ、秋の季節を笠を着て旅する漂泊の身は、段々年を取っていくものだ³⁰と嘆く様を詠み、原詩の情緒に呼応していることが分かる。⑪の原詩は、糸が乱れるように心が愁え、草木が枯れ落ちるような霧落の身には、秋風を聞けば悲愁の情が堪え難いため、聞くことができぬとある。素丸はそれに同調して、秋風が憂いの声を身のうちに響かせ奏でているよ、と詠んだ。

このように、以上の十句では原詩の景色を、「浦山」や

「白川」、「飛鳥山」といった日本の風景に置き換えつつ、原詩の情景に同調した吟詠が見られる。その一方で、「忍ぶ草」や「蝸牛」、「沓脱」などの身近で日常に馴染み深い事物を取り入れたり、鼻をかむといった俗世的な有様を盛り込むことで、俗談平話の俳諧を織り成そうとしていたことがうかがえる。

また、それに限らず、素丸が詠む詩題俳諧の中には、⑨のように漢詩を俳諧と合体して発句を成そうとした試みが注目される。

「尋隠者不遇」

松下問童子 言師採薬去

只在此山中

⑨ 雪深うして処をしらず薬掘

(季語：「薬掘」³¹で秋)

素丸は原詩の四句目「雲深不知処」を削除した。右記の⑨の上句と中句の「雪深うして処をしらず」は、原詩の「雲深^{ウチ}不^レ知^ラ処^ヲ」の訓読にならない、「雲」を「雪」に置き換え、「雪深」い風景を描き出している。『俳諧類船集』「高根」の項目には、「深雪」と連想される表現が提示されており、発句における「雪深うして」の表現から高い山の情景を思い浮かべることができる。素丸は下句に秋の季語である「薬掘」を繋ぎ合わせて、原詩の「採薬」という表現を俳諧に転じている。これによって、原詩の意味が留保され、隠者が薬を採集していく姿を再現しながら、高い山で雪も深く、どこにあ

るか分からない葉を掘っていることだよ、と諧謔的な叙景を二重の意味で表現することを可能にした。素丸の発句は原詩の表現を再利用することで、詩句を俳諧化する発句を詠むことの可能性を示し、俳諧の味わいを深めたことに興味が尽きない。

四、結語

これまで考察してきたように、素丸の詠んだ詩題俳諧は原詩に同調して唱和するものもあれば、原詩と異なる視点で表現しているものもある。唱和する発句でも、異なる視点に転じて展開するものでも、いずれも近世中期以前の詩題俳諧にも見られる詠み方であるが、素丸らの発句には、「俗談平話」という俳諧の傾向が吟味されている。

ところが、第三節で考察した発句「雪深うして処をしらず葉掘」では、これまで原詩を踏まえて受動的に発句で吟詠されていたのが、能動的に漢詩と融合させて発句に生まれ変わらせている。このように素丸が漢詩の表現を俳諧に生まれ変わらせることで、逆に原詩と響き合う作用をもたらしたことは、非常に意味深く思われる。これは近世中期における詩題俳諧の構造に新しさや諧謔を加味し、漢詩の情緒の再現を通して、より俳諧に訳されているような吟詠方法も創成される、という側面も持ち合わせるのではないか。

以上のように、本稿では近世中期における詩題俳諧の一端を考察した。今後の課題としては、素丸の周辺における詩題

俳諧の形態をさらに追究していきたいと考えている。

【付記】

本稿は、二〇一五年度台湾科技部研究費補助金「近世中期詩題俳諧之發展－江戸蕉門與俳書《青瓢》」(課題番号: MOST104-2410-H-110-033-)により、二〇一六年五月に行った現地調査で得られた資料に基づいて書かれたものです。本稿の執筆にあたりましては、公益財団法人 角川文化振興財団及び杉下元明先生、鈴木重雄氏に貴重なご助言をいただきことができました。記して感謝の意を表したく存じます。さらに、査読の労を惜しまず貴重なご指摘を下された本誌査読者の先生方にも心から感謝を申し上げます。なお、本稿における文責はすべて筆者に帰するものであることを申し添えます。貴重な資料の閲覧、引用を許可してください。関係諸機関の方々に、この紙面を借りて、篤く御礼を申し上げます。

【添付資料】天明年間以前に刊行した唐詩選集関係書「一覧表」

類別	書名	巻数	出版年	西暦	編者/校正者
漢詩選集	① 『唐詩選』	七卷	享保九年	1724	服部元喬(南郭校)
	② 『唐詩選』	七卷	宝暦三年	1753	
	③ 『唐詩選 四声並片仮名付』	七卷	宝暦三年	1753	不詳
	④ 『唐詩選 唐音付』	二卷	安永六年	1777	不詳
	⑤ 『唐詩訓解』	七卷首 <small>七卷首</small>	寛文年間	1661-1673	李攀竜撰、袁宏道校
	⑥ 『唐詩句解』	七卷	享保二十年序	1735	入江忠園(子園)
	⑦ 『唐詩解』	五十卷	宝暦四年	1754	唐汝詢
	⑧ 『唐詩要解』	二卷	宝暦八年	1758	岡島順竹場
	⑨ 『唐詩訳説』	十二卷	宝暦十年、明和九年	1760-1772	玩世釈覚瑞(美順)
	⑩ 『唐詩国字辨』	七卷	明和三、七年	1766-1770	(明)李滄溟選、服部南郭解
	⑪ 『唐詩選事証』	二卷	明和五年	1768	本橋子恭
	⑫ 『唐詩直解』	未見	明和九年	1772	吳章庵
	⑬ 『唐詩集注』	七卷	安永三年	1774	釈顯常
	⑭ 『唐詩解頤』	七卷	安永五年	1776	
	⑮ 『唐詩選画本』	七編	天明八年(初編)～天保七年	1778-1836	初編・五言絶句の編者は橘石峰
	⑯ 『唐詩選餘言』	二卷	安永八年	1779	戸崎允明(淡園)
	⑰ 『唐詩選夷考』	七卷	天明元年	1781	平賀晋民(中南)
	⑱ 『唐詩選国字解』	七卷	天明二年初版、寛政三年流通	1782、1791	服部南郭
	⑲ 『箋註唐詩選』	八卷	安永九年序、天明四年刊	1784	戸崎允明(淡園)
	⑳ 『唐詩児訓』	三卷	宝暦八年	1758	新井祐登(白蛾)

※上の一覧表は主に天明七年以前に流通した「詩集」を中心に網羅したもので、『唐詩函』等の「辞書類」や『唐詩事略』等の「故事類」、『唐詩選類材』等の「類書類」、『篆書唐詩選五言絶句』等の「書法書」、『唐詩選唐音』等の発音教材は本論の検討する対象範囲ではないため、表示しないものとする。

1 延宝八（一六八〇）年四月に刊行された『桃青門弟独吟廿歌仙』と同年六月の嵐雪序「田舎之句合」の句の中に、漢詩を題詠する端緒が見られると、稲葉有祐氏が『みなしぐり』再考―方法としての追和と唱和―（『立教大学日本文学』九十八号、二〇〇七年）、59、71頁において指摘している。

2 拙論、「近世前期における俳詠流行の発端：越人編『鵲尾冠』・『庭竈集』に収録した「詩題俳諧」を中心に」（『日本語日本文学』(ACD)、第四十四輯）、二〇一五年十一月、26、47頁。

3 「雪門」、俳諧流派。雪中庵服部風雪を祖とする一派。雪中庵三世大島蓼太が江戸座に対抗し江戸俳壇に雄飛した宝暦年間（一七五一―一七六四）に成立の呼称であろう。雪門の繁栄は蓼太時代を頂点とするが、それ以後も名門として、雪門の中心雪中庵の道統は代々継承され、昭和に至っている。勢力範囲は江戸および関東・東北・東海地方。連句を重視する。（大磯義雄氏執筆、『国史大辞典』による。傍線は筆者、以下同）。

4 「三物」、連歌俳諧の様式。連歌時代から、発句・脇句・第三の三句は重要視され、三句一聯として独立して詠まれたが、近世以降は、特に歳旦三物（歳旦の祝詞として発句・脇句・第三の三句だけを詠むこと）として俳壇に定着した。（鈴木勝忠氏執筆、『国史大辞典』より抜粋）。

れる、という。
10 堀川貴司・浅見洋二編『蒼海に交わされる詩』（波古書院、二〇一二年）

11 例えば、『唐詩訳説』は五言古詩と七言古詩のみ収録している。
12 例えば、『唐詩選餘言』は五言絶句からいくつかの詩句を選出して解釈を行っているが、素丸の引用した「汾上驚秋」と「尋隠者不遇」を収録していない。

13 例えば、『唐詩解』と『唐詩解頤』、『唐詩選画本』がこの類である。
14 荒井秀夫『江戸本屋出版記録 下巻』（一九八二年、ゆまに書房）、90-93頁によった。

15 例えば、『唐詩要解』と、『唐詩選事証』、『唐詩直解』がこの類である。
16 蓼太『三物句解』（明和五（一七六八）年序）、松宇文庫所蔵に拠った。

17 横濱文孝「近世中後期俳壇の諸相―葛飾派の実態と身分的秩序に変容について―」（竹内誠編『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版、二〇〇三年）、558-583頁。中村俊定氏も「葛飾蕉門と雪門との交渉」（『国語と国文学』第十巻第八号、一九三三年、55頁）において、「この葛飾風をしてとにかく東都の俳壇に登場させ、抜くべからざる地位を築いたのは三世素丸の力である」と言及している。また、大磯義雄氏は『国史大辞典』「葛飾風」項目で「三代目の

5 池澤一郎氏の『唐詩三物』と『唐詩選三物』（明治大学教養論集）三七七号、二〇〇四年一月、81-97頁）によると、『唐詩選三物』の刊行時期は『唐詩三物』の以前かと推定されている。よって、『唐詩選三物』は序跋・刊記が掲載されていないが、宝暦七（一七五七）年以前に出版されたものか。

6 書誌情報について、前掲注（5）「『唐詩三物』と『唐詩選三物』」81-97頁を参照されたい。
7 『俳文学大辞典』丸山一彦氏執筆参照。書誌情報について、矢羽勝幸「翻」溝口素丸十七回忌集『青ひざり』（『二松學舎大學東洋学研究所集刊』第二十六号、一九九六年三月）、183-223頁）を参照されたい。

8 『唐詩選』の刊行状況について、有木大輔『唐詩選版本研究』（好文出版、二〇一三年）、96頁参照。
9 服部南郭述・日野龍夫校注『唐詩選国字解』①（東洋文庫四〇五、平凡社、一九八二年）における日野龍夫氏の「解説」によると、南郭校訂の『唐詩選』の刊行により、それまでに流行していた『三体詩』などの選集まで完売し、『唐詩選』の初版から幕末の万延元（一八六〇）年までの約一四〇年間に十四の版があり、再版のたびに版木も更新されたという。版木は通常約五千部印刷すると消耗して、新たな版木を彫刻することから、『唐詩選』は少なくとも十万余部に近い、すなわち驚異的な部数で刊行された。つまり、『唐詩選』は近世後半のロングベストセラーと考えら

溝口素丸は雪門の大島蓼太らと組んで江戸座に対抗し『続五色墨』を撰し、天明四年（一七八四）はじめて葛飾蕉門をとらえた。」と素丸の功績を記している。
18 前田利治「翻刻」『葛飾正統系図』（『武蔵野女子大学紀要』第十三号、一九七八年）、59-69頁。『葛飾三世素丸：（中略）六十歳にして活道耳と言ひ、蕉翁より五老井に伝ふる処の秘書二巻を得て法といひ式といひ、此外に求るに及ばずと天明四年甲辰の春始て葛飾蕉門と号し：（後略）』。
19 寛政八（一九七六）年序、絢堂徳布編。本文は佐々醒雪・巖谷小波編『名句俳句集』『素丸発句集』（一九一三年、博文館）に拠った。

20 俳諧において、『伊勢物語』七段「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうら山しくもかへる浪かな」の和歌を踏まえた「花の浪や浦山しくもかへり咲 重尚」（湖春編『続山井』寛文七（一六六七）年板）や「驚かぬ身は浦山（羨まし）秋の風 万国」（二夜庵闌更著編、蓑笠庵梨一明和六（一九六九）年序『誹諧有の儘』）などの発句があり、「浦山し」は「羨まし」の掛詞として使われてきていることが分かる。
21 大江千里は白居易の「秋霜 鬢 似 年空長」を踏まえて、「秋の夜の霜にたとへつ我が髪は年の空しく老いのつもれば」（『千里集』、寛平六（八九四）年写、肥前松平文庫蔵本に拠った）と詠んだ。素丸がここに使う「年の霜」という表現はおそらくこの類の和歌を意識したうえで、年が虚しく老けるように見える白髪のことを譬えたのではな

いかと考える。

22 松濤軒斎藤長秋著『江戸名所図会』（天保五〜七（一八三四〜一八三六）年）「巻七」「飛鳥山」の項目において、「（飛鳥山は）数万歩に越えたる芝生の丘山にして、春花・秋草・夏涼・冬雪眺めあるの勝地なり」とある。本文は国立国会図書館デジタルコレクションに拠った。

23 「篁」は「竹の林」であると『唐詩兎訓』で解釈してある。24 『俳諧類船集』『忘れ草』の段では『伊勢物語』『百段』で忘れ草と忍ぶ草を同じ草とすることを引用し、また「忘れ草」を連想する表現の中で、「憂にたつ月日」と提示される。（本文は野間光辰『俳諧類船集索引 付合語編』一九七三年、般庵野間光辰先生華甲記念会に拠った）。

25 この部分の解釈について、特に公益財団法人・角川文化振興財団の先生方よりご教示いただき、深くお礼を申し上げます。

26 例えば、『夫木和歌抄』では「蝸牛」を前書きに「百首御歌 家をすてぬ心はおなじかたつぶりたちまふべくもあらぬ世なれど 土御門院御製」や「家は捨てずなにかなにはのかたつぶりつのくにありと身をたのむらん 藤はら為頭」などの和歌が収録され、蝸牛を「家を捨てない」意味として用いられていることが分かる。

27 北村季吟『和漢朗詠集註』（寛文十一年（一六七二））、架蔵本によった。

28 「身に調べる」という用法は和歌や俳諧では見出しがたい

40 未見資料。

41 現在、九州大学附属図書館・雅俗文庫（中野三敏コレクション）のみ所蔵。

42 新城市教育委員会・牧野文庫蔵、国文学研究資料館マイクログフィルム。

43 刈谷市立刈谷図書館・村上文庫蔵、国文学研究資料館マイクログフィルム。

44 現在、関西大学総合図書館及び龍谷大学大宮図書館のみ所蔵。

45 日本で未見の資料であるため、「諸子百家中國哲學書電子化計劃」〈<http://text.org/library.pl?if=gb&res=4474>〉の電子資料館にある（明）唐汝詢選釋『刪訂唐詩解』を確認した。

46 旧市立函館図書館蔵、国文学研究資料館公開資料。

が、『題林愚抄』第二十「雑部」に「ことのををひきくらべてや調べまし秋風なれば身にもしむかな 仲実朝臣」とある。

29 松本真奈美執筆、『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）を参照。

30 発句の「半バ老行」は「さ夜ふけてなかばたけゆく久方の月吹き返せ秋の山風 景式王」（『古今和歌集』『物名』）という傍線の部分を踏まえ、発句で書き換えたのではないかと推測する。

31 『俳諧其傘』（貞山編、元文三（一七三三）年刊）「葉」の項目に「葉掘、秋也」と解釈している。

32 山岸共「江戸時代刊行唐詩選関係書提要―江戸時代と唐詩選―（補訂稿）」（私家版、一九八六年六月）、5.13頁。慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、一九六四年）。整理と分類は筆者。

33 刈谷市立図書館蔵、国文学研究資料館紙焼資料。

34 会津若松市立図書館蔵、国文学研究資料館マイクログフィルム資料。

35 大阪女子大学附属図書館蔵、国文学研究資料館マイクログフィルム資料。

36 国会図書館蔵。

37 高知県立図書館・山内文庫蔵、国文学研究資料館公開資料。

38 岐阜市立図書館蔵、国文学研究資料館公開資料。

39 早稲田大学図書館蔵、「古典籍総合データベース」。

翻訳理論に関する参考文献

- ①平子義雄、『翻訳の原理』 東京・大修館書店、二〇〇八。
- ②松浦友久、中国詩歌言論、東京・大修館書店、一九八六
- ③Christiane Nord、Translating as a Purposeful Activity—
Functionalist Approaches Explained. 上海外語教育出版社、二〇〇一。

『俳文学報』投稿要項

1 投稿の種類と字数

本誌に掲載される論考は、その内容、分量に応じて次の2種とします。

A 二十七字×二二八行 B 二十七字×六一二行

Aは、将来の長編論考につながる事実や覚書といった性格のもの。

Bは本格的な長編論文とするが、資料紹介や年譜などで長編に及ぶものは対象外とします。

*投稿に際しては、右の字数・行数にしたがってA4用紙に印字したものを提出してください。

2 投稿の締切と送付先

締切 毎年七月第三日曜日

送付先 〒六五八一〇〇六三 神戸市東灘区住吉山手四一四一三三

富田志津子 dftay116@kcc.zaq.ne.jp

郵送によって、右記に紙媒体の原稿三通（A4版）が到着したことをもって投稿を受け付けたこととします。後日、電子メールの添付ファイルにより電子テキスト（ワード、一太郎などで作成されたもの）を右のアドレスに送付してください。

3 査読

投稿原稿については、A、Bともに、『会報』編集係三名によって査読を行い、修正や書き直しを求めることがあります。また、よりよい論考とするために再投稿をうながすことがあります。また、必要に応じて、編集係以外の会員に査読を依頼することがあります。

4 刊行時期

本誌の刊行は、毎年十月中旬を目途とします。

5 その他

① 資料紹介・翻刻の場合、投稿の際に写真もしくは原本のコピーなどを添付すること。なお、写真版の掲載が必要な場合には、その旨を投稿時に申し出ること。ただし、写真版の掲載については、編集係において判断する場合があります。

② 引用等については通行の字体を用いることとします。

③ 著者校正については、初校時の一回のみとします。

例会の記録

第504回 平成29年9月17日(日) 於柿衛文庫

其角の漢籍受容 三原尚子

——「嘲仏骨評」を中心に——

芭蕉発句における音韻の中国語訳

胡 文海

江戸座二世祇徳門の俳諧

早川由美

——高点付句集と歳旦——

蕪村筆「緑陰渡水図」(仮題)について

藤田真一

第505回 平成29年10月15日(日) 於柿衛文庫

『宇陀法師』輪読 松尾真知子

同 露口香代子

『続あけがらす』輪読 村井磨音

第506回 平成29年12月17日(日) 於柿衛文庫

神沢杜口の俳諧 奥野照夫

「海棠」考 中村真理

『宇陀法師』輪読 露口香代子

第507回 平成30年2月18日(日) 於柿衛文庫

俳句の受容と英訳俳句

——ブライスとヘンダーソンの英訳俳句——

小村志保美

神沢杜口の俳諧 奥野照夫

『宇陀法師』輪読 露口香代子

第508回 平成30年3月18日(日) 於柿衛文庫

シンポジウム

「世界の中の俳句(HAIKU)」

詩としての俳諧、俳諧としての詩

マブソン青眼

芭蕉発句における中国語訳

——四言詩形での試み——

胡 文海

H・Gヘンダーソンの英訳俳句

小村志保美

第509回 平成30年4月15日(日)

於関西学院大学梅田キャンパス

『宇陀法師』輪読 露口香代子

『続あけがらす』輪読 胡 文海

第510回 平成30年5月20日(日) 於柿衛文庫

去来著『旅寝論』

——書誌と序文—— 藤田真一

『其蝸庵杜口発句集』に登場する人物

奥野照夫

第511回 平成30年6月19日(日) 於柿衛文庫

『其蝸庵杜口発句集』——杜口と蕪村——

奥野照夫

『続あけがらす』輪読 黒川悦子

第512回 平成30年7月15日(日) 於柿衛文庫

『続あけがらす』輪読 西出春菜

『旅寝論』輪読 三原尚子

俳文学報

会報 大阪俳文学 第52号
研究会

【頒価千五百円】

平成三十年十月十二日 印刷発行

発行所 大阪俳文学研究会

〒670 8542 姫路市上大野七丁目二一

姫路獨協大学外国語学部

渡邊志津子研究室内

電話 〇七九二一三三二二一(代)

振替 〇〇九九〇一五七三六〇

印刷所 サンキ印刷株式会社
〒531 0076 大阪市北区天淀中二丁目七ノ一四
電話 〇六〇六四五三六五四(代)